

チケット

[参加方法]

一部予約不要のプログラムを除き、ご予約は、E-mail、または、WEBサイトの予約フォームよりお申込みください。

E-mailの場合、1. プログラム名 | 2. 日時 | 3. 人数 | 4. 氏名 | 5. 連絡先 (E-mail、電話番号) | をご記入の上、お申込みください。

[申込先: WWFes事務局]

E-mail | bodyartslab@gmail.com (チケット申込み専用アドレス)

予約フォーム | <http://bodyartslabo.com/wwfes2012/education/form>

- 原則として当日受付を行なう予定ですが、一部予約不要のプログラムを除き、事前のご予約をおすすめします。事務局からの返信をもってご予約の完了となります。

- お支払いは、イベント当日受付でのご清算となります。

- 原則として、お申込み後のキャンセルは受け付けておりません。やむをえない事情でキャンセルされる場合は、事前のご連絡をお願いします。

会場

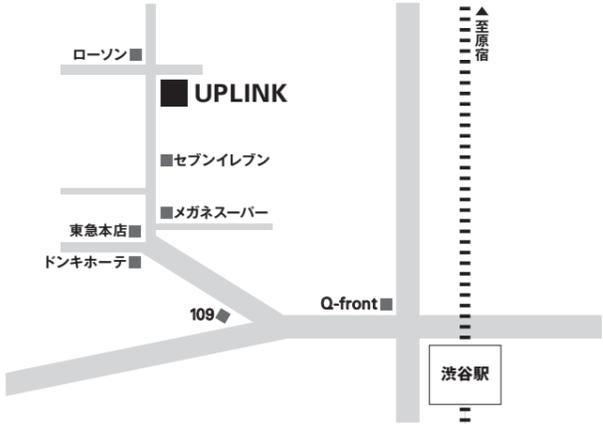
森下スタジオ | 新館Sスタジオ



東京都江東区森下3-5-6

- 地下鉄都営新宿線・都営大江戸線「森下駅」A6出口より徒歩5分

UPLINK



東京都渋谷区宇田川町37-18 トツネビル1F

- JR・東急・東京メトロ・京王井の頭線「渋谷駅」より徒歩6分

03-6825-5502 | <http://www.uplink.co.jp>

UPLINK FACTORY

オハッド・フィショフ

Ohad Fishof

音楽、ダンス、映像、パフォーマンス、インスタレーションなど多岐のジャンルにわたり活動しているアーティスト。イスラエルの先駆的アート・ポップ・バンド、Nosei Hamigbaatのミュージシャンとして活動を始め、その後、ダンス、パフォーマンス、インスタレーションへの楽曲提供をしながら、活動の幅を音楽以外へのジャンルへも広げ、1997年には、ロンドンのラバンセンターでダンスの修士号を取得。その後数年にわたりロンドンでダンス、パフォーマンス、また映像と音によるインスタレーション作品を製作しつづけ、2001年にはUri Katzensteinとの共同作品をヴェニス・ビエンナーレで発表。ここ10年では、即興ライブ、サイトスペシフィック・パフォーマンス、ビデオアニメーション、ダンス、サウンドトラック作品など、身体をベースとしたユニークな時間芸術作品を展開している。2007年にIshai Adarと結成したデュオグループBney Hamaでは、サーキットイベントやボーカルを務め、2008年にはイスラエル文化エクセレンス財団の受賞アーティストに選ばれる。

パッドシェバ舞踊団とその芸術監督であるオハッド・ナハリンの長期にわたるコラボレーターであり、《Three》《MAX》《Seder》《Furo》《Telophaza》の作曲をてがけ、《Telophaza》および、音楽監督も務めたナハリンのソロ作品《Playback》ではドラマトウルクとして参加。また、Gaga、ナハリン独自の動きを教える教師として、日本、アメリカ、スイス、ドイツ、イスラエルでワークショップを行う。現在、テレアピブを拠点とし、Hamidrahsa 芸術大学、ベツアルエル美術デザイン学院で教える。

<http://www.ohadfishof.com>

デイビッド・ブリック

David Brick

振付家。アメリカ・フィラデルフィアを拠点におき、コラボレーションをベースとしたコンテンポラリー（実験的）な作品で知られるHEADLONG DANCE THEATERを1993年に共同設立し、共同芸術監督を務める。代表作に、さまざまなホテルのプールで上演される《HOTEL POOL》、都会の街中を、携帯を通じて観客一人ずつがパフォーマンスを経験する《CELL》、身体を失った後の身体を想定した《MORE》など。ベッシー賞をはじめ複数の賞を受賞。若手アーティスト育成プログラム、Headlong Performance Instituteにおいて学長も務める。

ソロ活動においては、Pig Iron Theater Companyとのコラボレーション《LOVE UNPUNISHED》や、作家ティム・オブライアンと村上春樹の小説「ねじまき鳥クロニクル」を基にしたダンス芝居《WIND-UP》のディレクターとしても活躍。アメリカンダンスフェスティバルでインプロビゼーション、コンタクトインプロビゼーション、感覚から生まれるムーブメント等のクラスを教えるとともに、プリンマー大学での講師も務める。2006年にはPewフェローに選ばれ、本年度には日米芸術文化交流のフェローとして文化庁より招聘されている。

<http://www.headlong.org>

Body Arts Labortatory

ボディ・アーツ・ラボラトリー (BAL、2008-) は、ダンスを中心としたアーティストが運営するオーガニゼーションです。毎年行なうフェスティバルのほか、主にWebサイトで批評・インタビュー・プロジェクトのドキュメントなどを発信。BALは、アーティストの創作にともなうコミュニケーションをサポートするシステムとして機能することをめざします。

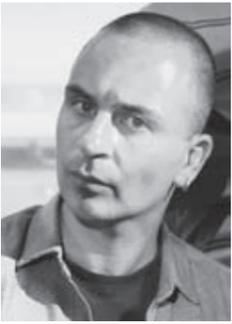
<http://bodyartslabo.com>

Webアーカイブ(一部)

インタビュー: 中馬芳子 (予定)、桂勘、長谷川六、合田成男、平原慎太郎、佐多達枝、坂田有紀子/寺田未来、室伏鴻、大橋可也、金森稜、伊明希 (コン・ミョンフィ)、竹之下亮、山崎広太

Whenever Wherever Festival 2012 | Part 2 スタッフ

プログラム・ディレクター: 山崎広太 | プログラム・コーディネーター: 佐藤美紀
エディター: 印牧雅子 | インターナショナルプログラム・アシスタント: 西村未奈
インタナー: 川田夏実、石山千尋、齊藤コン、南千尋、三石祐子、佐々木智子/
橋本玲美、津久井健太、伊藤陸、水島英樹、矢澤美希、藤佳子 (予定)
宣伝美術: 鶴崎いづみ



5.15—6.6 Festival | 7.24—8.5 Education
Body Arts Laboratory | <http://bodyartslabo.com/wwfes2012>

Whenever Wherever Festival 2012

Whenever Wherever Festival 2012

Part 1 | **Festival**

公演・イベント

5月15日 [火]—6月6日 [水]

[終了しました]

Part 2 | **Education**

クラス・ワークショップ

7月24日 [火]—8月5日 [日]

会場: 森下スタジオ

(一部プログラムを除く)

企画/主催:

ボディ・アーツ・ラボラトリー

助成:

公益財団法人セゾン文化財団

東京都芸術文化発信事業助成

(Educationを除く)

協力:

イスラエル大使館

GAGA japan

UPLINK

スタジオ アーキタンツ

お問い合わせ:

ボディ・アーツ・ラボラトリー

bal@bodyartslabo.com

090-4069-7719

—

<http://bodyartslabo.com>

[twitter@bodyartslab](https://twitter.com/bodyartslab)

facebook.com/bodyartslabo

アーティストが主導するダンス・オーガニゼーションの提案としてはじまったボディ・アーツ・ラボラトリー (BAL)。いわば、その運動体としての形態(プラットフォーム)を試行するかたちで毎年行なってきたフェスティバル、Whenever Wherever Festival (WWFes、ウェン・ウェア・フェス)が4年目を迎えました。WWFesは舞台表現に限定されない身体芸術をめぐる環境(インフラストラクチャー)にはたらきかけ、対話の場を開き、その深化を旨として、創発的なコミュニティのあり方を描く実験を重ねてきました。そのなかで、アーティストや研究者ら多くの実践者との協働が実現しました。

そうした歩みを踏まえて、WWFes 2012は、公演・イベントを中心とするPart 1(5月-6月)と、クラス・ワークショップ(エデュケーション[教育]・プログラム)が中心のPart 2(7月-8月)の二期に分けて開催します。

Part 2 | Education

クラス・ワークショップ |

リサーチ/ワークショップ(創作ワークショップ)

セルフ・コーチング

テクニク・クラス

GAGA/people

—

オハッド・フィショフ(イスラエル、パッドシェバ舞踊団)、デイビッド・ブリック(アメリカ、ヘッドロング・ダンスシアター)による二つの創作ワークショップは、多視点からダンス/パフォーマンスを実践的に思考する大変貴重な機会となります。

そして、BALを象徴するリサーチ/エクスチェンジ・ワークショップ「セルフ・コーチング」は、講師に、田辺知美、工藤聡、手塚夏子、羽鳥嘉郎(けのび)各氏を迎え、実験色豊かに展開します。

また、山崎広太のテクニク・クラス、オハッド・フィショフのGAGA/peopleクラスも開講されます。

- **Part 1**では、アーティストによるオーガナイズに共振する、海外からの3アーティストの日本でのリサーチ活動をWWFesに接続し、紹介する初めてのプログラムを実施。そのほか、BALの提案から発するラウンドテーブル、そして、世代・ジャンル間を横断するエクスチェンジ/コミュニケーション・プログラムを特徴とするパフォーマンスなど、計15のイベントを行ないました。

- **Part 2**のエデュケーション・プログラムは、オハッド・フィショフ(パッドシェバ舞踊団)ほか多彩な講師を迎えて開講します。エデュケーションにおいても、WWFesは、アーティストが自らの活動やその技法について省察する土壌を育み、創作に伴うコミュニケーションをサポートすることを指針とします。

イベント |

パフォーマンス

ラウンドテーブル

—

オハッド・フィショフが「建築について」の自身の新作パフォーマンスを上演。また、フィショフの6日間のワークショップの成果として、受講生によるショウイングを行ないます。そして、パフォーマンスを通して、それぞれの身体技法を公開リサーチするエクスペリメンタル・プログラムには、大倉摩矢子と鯨井謙太郎が挑みます。

WWFes Part 1に続き、身体芸術をめぐる環境のリサーチの一環として、ラウンドテーブル「On The Boat」の第2回目を開催し、ダンス教育をテーマに対話の場を開きます。

—

[コンセプト関連テキスト]

- Whenever Wherever Festival 3年間を振り返って | 山崎広太
<http://bodyartslabo.com/about/history/wwfes>